

特集

「きく力」を育てる

インタビュー 阿川佐和子

相手に寄り添う気持ちをもつ。

それが、「きく」ということ。

インタビューを通して、これまで千三百人以上の本音を引き出してきた阿川佐和子さん。二〇一二年に出版したエッセイ『聞く力』は、百七十万部を超えるベストセラーとなり、現在も多くの人がそのコミュニケーション術を参考にしようとしています。
本誌では、阿川さんに、小学生がインタビューするとき心がけるべき点についておうかがいしました。

苦手だからこそ分かることがある

——雑誌『週刊文春』でのインタビューの仕事は、二十五年になるそうですね。

必死にやっていますが、もともとインタビューは苦手なんです。いろんな人に会いたいとか、どんどん人脈を広げたいとか、そういう意欲はないんです。好きで好きでたまらないものでお金を稼ぐことができれば幸せだと思いますが、必ずしもそうはいかない。でも、苦手だと思っていたことも、長く続けていれば評価されることはある。「きみがいてくれると…」なんて言わ

れると、やっぱり嬉しいですよ。好きなことをやるためには嫌いなこともやる。それが成長につながるんだと思って、これまでインタビューの仕事を続けてきました。

——阿川さんならではのインタビューの特徴はどんなところでしょうか。

以前、雑誌の編集長に、インタビューアとしての不安を漏らしたとき、「阿川さんは阿川さんらしいインタビューでいいんですよ」と言われました。黒柳徹子さんはそれこそインタビューの名手といわれているけども、私とはやり方が違うし、「徹子の部屋」という番組独特の雰囲気があります。

今号は、「きく力」をテーマに、指導方法のほか、きき方のこつ・心構えなどについてご紹介します。

はじめに、『聞く力』の著者・阿川佐和子さんへのインタビュー、次に、五年教科書教材「きいて、きいて、きいてみよう」の授業の様子（授業者 筑波大学附属小学校 青山由紀先生）をお伝えします。そして、藤森裕治先生（信州大学教授）には、授業の分析と、「きく力」を育む際のポイントを教えてください。

プロインタビューアとして知られる吉田豪さんは、とにかく相手のことを徹底的に調べて、相手に会ったときに、どれだけ調べたかという資料を山のようにテーブルに積み上げて、「僕はあなたについてこれだけ勉強して、今日ここに来ました」というところから始めるそうです。そうすると相手は、そんなに深く知られているのであれば、もうさらけ出すしかないって思うのでしようね。

でも私は、資料をほどほどに読んだときのほうが、筋書きどおりにならず素朴な質問が出てくる。例えば、人気絶頂のタレントが、三年間アメリカに行くことを決めたとする。理由は既にいろんな雑誌に載っているけれど、一度自分なりに想像してみよう。そこで仕事を辞めたら収入がなくなるよね。どうするんだろう。不安なはずじゃない？って。そういう素朴な疑問をぶつけ



阿川佐和子

1953年東京都生まれ。報道番組のキャスターを務めた後に渡米。帰国後、エッセイスト、小説家として活躍。『ああ言えばこう食う』（共著／集英社）で講談社エッセイ賞、『ウメ子』（小学館）で坪田謙治文学賞などを受賞。名インタビューアとして知られ、週刊文春の対談「阿川佐和子のこの人に会いたい」は、連載1200回を超えた。トーク番組「サワコの朝」は、2011年より現在も放映中。ゲストの意外な側面や魅力を引き出している。

撮影（P3～9）：鈴木俊介

「きく力」を育てる



てみると、「実はね…」という新たな話が
きけることもあります。これが、自分なり
のメソッドなのかもしれません。

——インタビューをするときは、どのよう
なことに気をつけていますか。

私は本来、おしゃべりな人間なんです。
だけど、与えられた仕事は、きくという仕
事。そうすると、この人はどうやったら気
持ちよく話せるだろうかと、話し手の気持
ちで考えるようになる。この話題はどうも
苦手そうだなとか、今、おながが空いてい
るのかなとか。それから相手の素振りやう
つむき加減を見て、恥ずかしがっているの
かな、緊張しているのかなとか。どうい
う距離感やテンポが好きなのかも含めて、い
ろんなことを考えています。

話す側も、どういう言葉だったら相手に
伝わるかを考えながら話しているわけで、
ちよつと笑える事件のことを話したのに、
全然笑ってくれないなどか、相手の反応を
見ながら話している。だから、きき手はそ
れにはきちんと応える努力をしなければい
けないと思っています。

——細かく反応するように心がけているの
ですね。

「赤」と答える。なぜ赤が好きなのか、で
きるかぎり具体的に、三つ理由を挙げよと。
そうすると、きかれた側はいろいろ考えま
す。赤を着ると元気になるからとか、そう
いえば、うちの玄関は生まれたときから赤
だったとか。そういう具体的な話が出てく
るまできく。

それから、おもしろがつてきくことも大
切だと思えます。おもしろいときにはおも
しろいと反応し、驚いたときや疑問に思っ
たときも素直に反応する。話し手の一言、
一言をよくきいて、なるべくその人の動き
や、口元や目を見る。ついつい用意した質
問にとらわれそうになるけれど、興味をも
つ姿勢があれば、その一言、一言の中から、
次の質問が見つかると思います。

大きな声を出して 緊張を解く

——なかには、とても恥ずかしがり屋で、

でも気をつけているのは、安易に「分か
ります」って言わないことです。例えば、
スポーツ選手が事故に遭って、「もうこの
スポーツは続けられないと思いました」と
言ったときに、「分かります」なんて軽々
しく言っただけはいけないでしょう。でも、相
手がどれほど、そのとき苦しい気持ちだっ
たのかギリギリまで想像して相手の気持ち
に寄り添いつつ、そこを丁寧に、丁寧に探っ
ていくと、今まで出たことのない言葉が出
てくるかもしれない。分かるはずはないけ
れど、「私もなるべく近くにいくよ」とい
う気持ちになるのが、きくということだと
思います。

興味をもつ姿勢があれば 次の質問は見つかる

——小学校の教科書に、きくことについて
学習する教材（五年）「きいて、きいて、き
いてみよう」があります。

（紙面を見ながら）今の小学生はこんな
ことをしているのね。プロみたいじゃな
い！自分がこれをやるのは想像できない
けど、もしやるんだしたら、いちばん苦し
な役をやってみたいな。最初から苦手だと
思っているんだから、うまくできなくてあ

思うように話せない子もいると思います。
そんな子へのアドバイスはありますか。

日本人は、大概みんな恥ずかしがり屋な
んですよ。理由は人によるとは思います。が、
恥をかきたくないという思いがあるんで
しょうね。それから、大きな声を出した経
験があまりないのかもしれない。

昨年、テレビドラマ「陸王」に出演した
際、とにかく大きな声を出せっていうのが、
演出家の私に対する要望でした。連続ドラ
マに出演するのは初めてだったので、上手
な演技なんて意識せず、とりあえず大きな
声を出すことだけを頑張ろうと思っただけ
でした。そうしたら自分でもびっく
りするくらい大きな声が出ることを発見し
ましたし、なんだか解放されたような気持
ちになりました。だから、インタビューを
する前に大きな声を出してみると、緊張が
解けて、ちよつと気が楽になるかもしれな
いですよ。あとは、にらめっことか、思い
きり笑ってみるとかね。



たりまえ。そこで何か嬉しいことがあると、
倍の喜びになると思うんですよ。子どもた
ちもきつと同じだと思う。おもしろいもの
や新しいものが見えてくるかもしれないし、
相手の意外な一面を発見するかもしれない。

——小学生の場合、きき手としてどんなこ
とを心がけるといいのでしょうか。

とにかく具体的にきいていくといいと思
います。例えば「野球が好き」という人
は、「なぜ好きなのか」「いつから始めたの
か」「どの瞬間がいちばんうれしかったか」
「最近どんなことで褒められたか」という
ふうにきいていく。「お父さんがやってい
たから野球を始めた」という答えをきいた
ら、「お父さんのプレーでどんなところが
すごいと思いますか」とか、なるべく具体
的に、箱を広げていくような形できいてい
くと、何かが出てくると思います。

よくある心理ゲームで、好きな色を一つ
挙げなさいという質問があつて、例えば、

今の子どもたちは、自己表現のしかたが
多様でうらやましいなと思います。テレビ
などの影響で、小学生でも踊ることが日常
的になっていて、とても上手でしょう。日
本は、昔は、微動だにせず歌うのが凛々し
いことだったけれど、だんだん変わってき
ましたね。インタビューも絶対に座つてや
るものだと決めないでもいいのかもしれない
せん。踊りながらインタビューしてみると
か（笑）。

——あまり身構えないことが大事なんです
ね。

そうですね。それからもう一つ。インタ
ビューに限らず、人と話をするときには、
常に逆のことを意識してみてもいいでしょ
うか。つまり、きき手ときは話し手のこ
とを、よく話す人は無口な人のことを。そ
うするとみんなが楽になるし、新しいもの
が必ず見えてきますよ。

常に逆のことを意識すれば、
新しいものが必ず見えてくる。